

咸宜園教育研究センター研究奨励事業報告会 参考資料

題目「広瀬淡窓の経書理解について

—淡窓の歴史観・運命観に関する一考察—

九州大学人文科学研究院 専門研究員
横山 慎悟

○淡窓の「天」

①禍福の数理的基準

無の用為るや、数を制するの道なり。夫れ数なる者は有形の免れざる所なり。昼夜相代わ

り寒暑相推るは、数の天に在る者なり。高岸谷と為り、深谷陵と為るは、数の地に在る者なり。生きるものに必ず死有り、興るものに必ず亡ぶこと有るは、数の人に在る者なり。但だ人なる者のみ心有り、天地と科を同じくせず。故に定数の来たるや、其の行事に随って変ず。（『析玄』）

此に千金有り、之を用いること多なれば、則ち一朝にして尽く。之を用いること儉なれば、則ち終身尽くこと無し。国家も亦然り。儉を尚ぶ所以なり。商は六百年、周は八百年、何ぞ其れ永きや。後世、乱亡相継ぎ、短き者は或いは四五年に止まる。又何ぞ促やかなるか。古時、封建もて治を為し、王者の封域、千里を過ぎざるも、天下の禄を以て天下の人を養う。其の受用すること儉なればなり。後世変じて郡県と為り、王者、天下を以て一身に奉ず。其の受用すること多なればなり。…天禄の降ること、何ぞ独り古のみに厚くして今に薄からんや。（『析玄』）

一治一乱、猶お晴雨のごとくなるか。天道、晴を以て常と為す。晴極まれば則ち雨ふる。

一たび沛然とすれば、天気故が如し。是れ順運と為す。百物の昌うる所以なり。晴未だ極

まらずして雨ふれば、久しく雨ふりて止まざること或り。是れ不順と為す。百物の成らざる所以なり。国も治を以て常と為す。治極まればすなわち乱る。是れに於いて大人の出ること有り、一たび戎衣して天下定まる。湯武の兵が若きは是れなり。治、未だ極まらず

して乱るれば、久しく乱れて止まざること或り。戦国六朝が若く、生靈の塗炭すること極まる。我が邦に革命有る無けれども、而れども治乱興廢の数、猶お之を異邦がごとくす。

豈に理の已むべからざるに非ざるか。『義府』

※人生百年なるは、天の定数にして、能く養うの具有り。声以て耳を養い、色以て目を養い、味以て口を養い、取捨以て心を養う。此れ天の付与する所にも亦定数有るなり。下士其の定数を知らずして妄りに之を用う。能く養うの具既に尽くれば、而ち養う所も亦随い亡ぶ。故に中路にして夭す。『六橋記聞』卷八)

② 大小の視点を兼備する「天」の賞罰

命の大端は三あり。曰く**宿命**、と。余慶余殃は己が身に由らず。曰く**正命**、と。善を為さば福を得、悪を為さば禍を得。曰く**随命**、と。人の為す所、天も亦之に随う。『約言』)

○昭陽『尚書考』¹における「天」理解

① 制度や政治の根源たる「天」

父子の親・君臣の義の如きは、生まれて人に存す。之を天の衷を降すと謂う。

(① 湯誥 降衷于下民)

尊卑上下、**天の叙する**なり。(① 説命中 奉若天道)

天殃は天罰と曰う。**刑書を為す所以**なり。(② 呂刑 夫罰不極庶民罔有令政在于天下)

② 為政者に佑助や賞罰を降す「天」

周室方^{まさ}に盛んにして武庚蠢く。此れ自ら滅亡を取るなり。故に曰く、天の殷を喪ぼすこと農夫の草を去るが若し、と。(① 大誥 天惟喪殷穡夫)

天畏の必ず**忱**^{まこと}なるをたすを以て、以て民情の帰背する所を見るべし。忱なれば則ち天、之をたすけ、民、之に帰す。忱ならざれば則ち天、之を罰し、民、之に背く。天心・民情は一なり。(① 康誥 民情大可見)

言うところは、身を以て天の大命を制するなり。天道は善に福し淫に禍して、天獄まこと実^{まこと}に死生の權を司る。(② 呂刑 自作元命)

③ 隔世代的な賞罰基準を有する「天」

先王、^{なんじ}乃の祖父の功を選ぶにして、一世に非ず。(① 盤庚 世選爾勞)

¹ 九州大学所蔵の二種の『尚書考』テキストのいずれにも、成立順・成立年を示す記述が見えないが、便宜上、巻一～八の現存するテキストを①、巻一～三・巻十～十二の現存するテキストを②と表記する。

○『読左伝』に描かれる国家や人の運命と「天」

①礼に外れた行いへの懲罰

翬の女を齊に逆^{むか}うること、桓公弑し立つが爲に、其の強援を結ぶなり。而して公の終に命を齊に隕^おとすこと、是れ天の隱公の爲に之に報ゆるなり。天道畏るべし。

(桓公三年「公子翬如齊逆女」)

②誤った祭祀への懲罰

淫祀に福無く、而して禍有り。記す者、以て戒を示す。(隱公十一年「公祭鍾巫」條)

③不可解な春秋期士人の言動

秦伯、豈に重耳を視ること天子の如くならんや。以て之を試みるなり。春秋の時風然りと爲す。應對し難き所以なり。(僖公二十三年「秦伯賦六月」)

荀息、謀を以て里克を討たず、而して徒に身を以て殉と爲すことを知る。虞虢を取りしときの智、安くにか在らん。春秋の人物、行事に解すべからざる者有り。抑左氏の事を叙ぶること、未だ盡くさざる所有るなり。故に孔子も陳文子の賊を討たざることを責めず。

(僖公九年「荀息死之」)

④『左伝』の人物評価への批判

讀みて此の段に至れば、則ち其の姦謀、得て掩うべからざるなり。季氏の魯を専らにすること、其の謀、季友に本づく。猶お北條義時の鎌倉に於けるがごときなり。左氏は古の稗官にして、此れ等の人物に於けるや、附會して以て其の美を成す。猶お三國演義の玄德に於いてし、水滸傳の宋江に於いてするがごとし。讀む者、一隻眼を具うれば而^{すなわ}ち可なり。

(閔公二年「成風屬僖公」)

※左氏の一部の体、必ず前後に照応するものに取り、其の寓意、別に在ること有り。後世の歴史、以て実を記すも、要なる者異なると為す。読者、浮誇あるを以て之を疑う勿れ、亦概ね以て真と為す勿れ。(九州大学中央図書館蔵『読左伝』昭公元年 当璧猶在)

○『左伝』以外の歴史上の事件に係る評価

①日中に一貫する天理

試みに和を以て漢に比して曰わん。神武天皇は我が羲・黄なり。王代風俗の美は三代なり。

豊聡王・淡海公の礼楽を制するは、周公の任なり。王室衰えて覇府興るは、猶お周室の東遷するがごとし。桓・文の命を諸侯に布くなり。足利氏の末に天下瓜分するは、是れ七雄の乱るなり。豊公興りて天下一に定まるも二世にして亡ぶは、秦始なり。烈祖の寛仁を以て衆を得、東武の業を開くは、漢高なり。…（『燈下記聞』巻四）

②歴史上の事件から導かれる「随命」の一解釈

加藤肥州の慶長の末に卒するは、天の之を全うせしむるなり。若し之に数年を加うれば、元和の初に至れば則ち天下の事、將に潰せんとするの隄が如し。一決の勢、朝に匪ざれば伊れ夕なり。侯有りとは雖も亦過むべからず。大阪の役既に興れば、西兵の競わざること、一肥州有りとは雖も、狂瀾を既倒に回すべからず。西に従うや、身死し国亡ぶ。是れ不智なり。東に与するや、弱きを避けて強きに就く。是れ勇無きなり。是れに於けるや、公の智勇困す。岡奉曰く「侯をして金城の難に殉ぜしむれば、豈に人臣の大節ならんや」と。何たるかな、所謂不智なる者。身を殺して難に殉ずると曰うは、人臣の小節なり。其の身を殺さずして国家を泰山の安きに置くこと、大節なり。諸葛孔明の蜀を安んずる能わず、身は国難に殉ずるが如きは、則何ぞ万世に責ばるるか。故に侯をして難に殉ぜしむれば、唯だ是れ一武夫なるのみ。勇は則ち有るも、智は則ち未だし。唯だ其れ難に先んじて歿するのみなれば、後人之を惜しみて曰く「肥州若し在さば、大阪の役其れ興らざるか」と。是れ天の其の智勇を全うせしむる所以なり。小松内府の死を祈り、丹羽長秀の自裁するも、其の事情亦類す。皆自ら全うする所以なり。（『燈下記聞』巻三）